

【特別支援学校のセンター的機能】



～しろがね特別支援学校による地域支援～

特別支援学校のセンター的機能として、専門アドバイザーが中心となり、前橋市・渋川市・吉岡町・榛東村の小学校・中学校・高等学校・幼稚園・保育園を訪問したり、保護者の悩みを聞いたりして、発達の気になる子ども達についての継続的な支援を行っています。

専門アドバイザーの仕事を紹介します



保護者から学習に関する相談を受けることがよくあります。

そんな中からある事例をご紹介します。

Aさんのお子さんは小学校2年生の男子です。教育熱心のAさんは宿題や学校の復習をみてあげています。でも、教えているうちにイライラがつのり、最後には怒ってしまいます。すると、子どももお母さんには教わりたくないと言って、途中で宿題を投げ出してしまうことが多いのです。怒ってはおいけないと思いながら、Aさんは教え始めるのですが、Aさんはどうしても最後は怒ってしまうのです。どうしたら、怒らないですむのでしょうか、という相談です。

では、なぜ、怒ってしまうのでしょうか。

考えられるのは以下の点です。

- ①1問教えたのに、同じような問題をやらせたら、3問中、1問しかできない。
「一度教えたら、同じような問題はすぐにできるようになるべきだ」という考えがある。
- ②前の日に教えたことを次の日に2割程度しか覚えていない。
「前の日に教えたことの8割程度は覚えているはずだ」という考えがある。

Aさんに話したら、納得していました。

知らない知識を知ったときの喜び、分からなかったことが分かったときの喜びは格別です。学ぶ喜びを知った子どもは自分で勉強するようになるのです。勉強は楽しいものです。

では、どうすればよいのでしょうか。

①について言えば、1問を自分で解けたら、「良かった」と一緒に喜ぶべきです。できなかった問題をできた喜びが感じられれば、次の問題も頑張ろうと子どもは思えます。できた1問に注目すべきで、できなかった2問に注目してはいけません。

②について言えば、2割覚えていて素晴らしいのです。どうして、覚えていな

かった8割に注目してしまうのでしょうか。

Aさんには、以下のことを伝えました。

④分からないことがあったら、一緒に辞書でもネットでも良いので親が調べる姿を子どもに見せること。

⑤暗記力を求めるのではなく、「できた」「わかった」という学ぶ楽しさを教えること。

⑥大人は掛け算でも漢字でも、接した回数が多いから自然に覚えられているだけで、子どもも回数を重ねれば次第に覚えられるようになるので、効率を求めないこと。

Aさんは私の話を理解して、実行してくれました。2～3年後、母親と話をする機会がありました。「あの頃は子どもの知識を増やすことが大事だと思っていました。でも、子どもが自分で学んだことに目を向けさせることで、一番大切な学ぶ楽しさを教えてあげられるのですね。私自身も子どもと一緒にそのことを実感しました。だから私は今は、歴史の本を好んで読むようになりました」と言っていました。

Aさんのお子さんは現在、大学生です。

自己有能感を高め、好きな学問に取り組んでいる現在の姿は保護者の子育てのたまものだと思っています。

相談依頼の件数（外部支援）H30.4.1～11月末日まで

対象	幼稚園 保育園	小学校	中学校	高等学校	その他	計
件数	210件	205件	40件	2件	9件	466件

（その他は関係機関からの相談および研修の講師依頼）

日頃から、本校のセンター的機能の御理解と御協力をありがとうございます。障害の有無にかかわらず、子どもの実態把握・指導内容・指導方法について悩んでいることがありましたら、お気軽に御相談ください。お待ちしております。



群馬県立しろうがね特別支援学校
担当：専門アドバイザー 尾岸 純子
電話：027-268-6111
FAX：027-268-6113
メール：shirogane-snes01@edu-g.gsn.ed.jp